

住まいに反映する高齢者の家族関係と生活意識について
—— 地域ケアサービスの効果 ——

今 川 峰 子 齊 藤 善 弘

**THE PERSONAL RELATIONSHIP AND LIFESTYLE OF
THE ELDERLY WITH THEIR FAMILY MEMBERS
—— THE EFFECTS OF GERIATRIC CARE SERVICES ON THE ELDERLY ——**

Mineko Imagawa, Yoshihiro Saito

Summary

In a previous study, we found that the elderly in rural communities were more likely to express the desire to live with their eldest son, and the rate of living together was actually higher. If the elderly want to live together so that they will have someone to take care of them, then the implementation of social services such as home helpers and day services may further reduce traditional reliance on the eldest son and wife, even in rural areas. For this reason, we conducted a survey among elderly persons living in regions which have already begun geriatric care services, and asked them about their lifestyles and relationships with family members, and then compared their answers with those of elderly and adults.

Subjects were 97 elderly persons (mean age 70.5 years) residing in farming town I, which was very quick in providing care services to community ; 102 elderly (mean age 72.0 years) residing in a suburban city B ; and 87 adult controls (mean age 42.3 years) .

On the question of who they wanted to look after them if they were bedridden, elderly men in both cities mainly said their wives, and women said they would rely on daughter-in law. Elderly women in City B preferred to live with their daughters more often than did those in Town I , and they were also more likely to disagree with traditional sex roles.

The results of this study of personal space support our previous findings , indicating that in both Town I and City B, the interpersonal distance between the

elderly and grandchildren and spouses are close, while relations with sons-in-law and daughters-in-law are more distant. Among the adult controls, more respondents were interested in living with their daughters, and preferred to be taken care of by their daughters, spouses, or community services. In both Town I and City B, more elderly respondents preferred to live in Japanese-style houses, but adult controls overwhelmingly preferred independent residences for the two generations. It would appear that the desire to live together with one's grown-up children is not driven by need for care or by economic reasons, but is rather a reflection of the social, family, and human values that the elderly have grown up under.

Received Oct. 27, 1995

Key words : elderly person, interpersonal distance, lifestyle

I 問題及び目的

日本の高齢者の子世代との同居率は、西欧諸国と比較して非常に高い。わが国の65歳以上の高齢者の同居率は、10年ほど前までは8割近くであったが、1994年の世帯調査¹⁾によると、全国平均は57.1%にまで減少している。しかし西欧諸国と比較すると、まだかなり高い。国際比較調査(1982²⁾, 1987³⁾, 1992⁴⁾)では、子世代との同居は、日本(1982, 52.1%; 1987, 49.7%; 1992, 45.0%), タイ(1982, 52.7%; 1987, 60.0%)が高く、逆にアメリカ(1982, 9.9%; 1987, 10.3%; 1992, 10.8%), イギリス((1982, 5.9%; 1992, 8.1%), デンマーク(1987, 5.1%)は低い。アメリカ、イギリス、デンマーク等は三世代家族の割合が1%前後と極端に低い。ほとんどの高齢者が結婚した娘や息子とは同居しないためである。

都道府県別の子どもとの同居率を見ると、山形、秋田、富山、福島、新潟、宮城、滋賀などが高く、鹿児島、広島、山口、東京、北海道などが低い⁵⁾。日本の同居率は全国一律ではなくて、産業構造の変化に伴う都市化の進展状況、その地域の歴史的・社会的要因などが影響していると考えられる。どの国でも産業の発展に伴い、都市部へ若年労働者が移住し、その結果として核家族が増加してきた。一般に高齢者は住みなれた土地を離れることに抵抗があり、都市部へ移住してまで子世代と同居することを望まない。このために、子世代との同居率が減少したと考えられる。アメリカ、イギリス、ドイツなどの西欧社会では既婚の息子や孫との同居は、前述の国際比較調査によると、5%以下になっている。ただイギリスでは産業革命以前であっても、既に三世代家族、拡大家族世帯は6%にすぎないとの研究も、1574年～1821年の国勢調査を基にして報告されている(Kimmel, 1990/1994)⁶⁾ イギリスの場合、産業の発展による都市への労働人口の流入によって同居率が低くなったのではなく、たとえ産業社会以前であっても高齢者が息子世代とは同居しないような家族形態となっていた

のである。

さて、国の違いによる同居率の相違を理解するには、産業の発展などによる外的条件のみならず、それぞれの国の社会的・文化的価値を考慮する必要がある。Kimmel (1990/1994) は、日本の高齢者の子世代との同居率の高さの理由について、以下のように記述している。日本では、高齢者世代が嫁による終身介護を受ける代わりに、長男とその家族に居住を提供してきた。住宅は不足しており、虚弱な老人に対する公的なサービスも不十分なため、拡大家族形態は両世代にとって有益である。反対の例をあげると、デンマークでは、高齢者は自立することに誇りをもっている。緊密な友人ネットワークと地域社会への関与が重視され、また高齢者のための社会的支援が充実し、高齢者は居住のことで彼らの子どもに頼るのを好まない。要するに、国による家族形態の違いの理解には、都市化などの外的条件だけではなく、広範な文化的背景を理解する必要がある。

文化的・社会的価値の側面から、日本における同居率の高さの背景を論ずる時、明治から戦前まで続いた「イエ」制度を抜きにしては論ずることができないであろう。また教育勅語と古くからの儒教的精神も少なからず影響している。「父母の教えは何事によらずこれを守り」「わが身を犠牲にしても親を養い」と教育勅語の中では親孝行が諭されていた。そして老親は子世代との同居という家族形態のなかで、大切にされ、嫁によって手厚く介護されてきた。

ところが終戦後、民法改正により「イエ」制度も教育勅語も廃止され、長男による家督相続もなくなり、財産は原則として子どもが均等に相続することになった。このため戦後の家族をめぐる混乱が指摘されている。ただ民法が改正されても、農村部では、現在でも長男が土地と財産の大半を相続し、老親を扶養する傾向が根強い。長男に土地と財産を相続させたいと高齢者の希望もあり、相続も兄弟間では均等でない。一般に農村部の高齢者ほど家族や身内と一緒に暮らしたいと希望し、その傾向が都市部と比較すると顕著である

(今川, 1993)⁷⁾

Kimmel は同居の背景として、社会的・文化的価値を指摘するが、具体的にそれは何を意味するのであろうか。同居によって高齢者は子世代に住宅を提供する、そして子世代からは介護を受けるという両者の相互依存の文化的価値観が日本には存在すると彼は言う。伊藤 (1994)⁸⁾ は、子世代にとっての主な同居の理由は、①住宅取得のため、②子育て支援を得るためなどを挙げている。逆に親世代の同居理由は、老後の介護のためのである。我が国では公的な介護制度が十分整備されていない。総務庁長官官房老人対策室 (1990)⁹⁾ の調査によると、30歳～69歳の男女を対象とした調査では、老後生活に不安を感じると答えたものは、79.9%と高く、その内容は「寝たきりや痴呆症になったときのこと」が49.3%と最も高く、次いで「経済的なこと」29.5%、「配偶者に先立たれた後の生活のこと」26.2%となっている。

以上から、日本では高齢者が子ども世代と同居を希望するのは、①寝たきりになった時の

介護への期待, ②経済的に自立が困難で, 扶養が必要なため, ③孤独を回避して家族との情緒的つながりを求めるためなど相互依存の人間関係が考えられる。

本研究は高齢者の同居希望の背景と, 家族の人間関係の実態を調査することを目的として実施したものである。1989年に, ゴールドプランが策定され, 全国の市町村で計画・実施に移されつつある。この政策によって, ホームヘルプサービス, デイサービスなどが充実すれば, 子どもに介護を頼る必要がなくなり, 同居希望も減ると予想される。むしろ地域での友人や隣人との緊密なネットワークが必要となる。家族との同居が①寝たきりになった時の介護への期待にのみあるとすれば, 特別養護老人ホームを中心に, 早くから介護事業を発足させている地域の高齢者は, 子世代との同居をそれほど望まないであろうと予想される。また経済的に自立が困難で, 扶養が必要なために同居を望むのであれば, 高齢者自身が経済的に自立できることによって同居率も減少するであろう。

次に高齢者世代は戦前に教育を受けた世代であるが, 介護を担う中高年世代は戦後の教育を受けている。家族成員それぞれ個人が尊重され, 自由意志によって婚姻・居住を決定することが当たり前として育った世代とは, 同居希望や生活意識なども異なるであろう。これらの中高年世代が次の高齢者世代へと移行する20~30年後には日本の高齢者の意識も変わるであろう。そこで第二に将来的な予測をするためにも, 高齢者と中高年世代との生活意識を比較し, 検討することを目的とした。

II 方 法

(1) 被験者と調査期間

被験者は, まずケアサービスが他地域より整備されている農村I町の高齢者97名, 平均年齢70.5歳(男性46名, 女性51名)を選んだ。この地域は, 米作と茶栽培が中心の農村地帯であるが, 近年は企業誘致による工場の進出も見られる。1972年にはホームヘルプサービスが開始され, 1976年にはI町の中心地に特別養護老人ホームが開設された。I町の比較対照群としてB市の高齢者102名, 平均年齢72.0歳(男性49名, 女性53名)を選んだ。B市はI町より都市化された地域であり, 中小の繊維工場が多く存在する。中高年世代については, 高齢者対策リーダー養成研修会に参加した成人87名, 平均年齢42.3歳(男性5名, 女性82名)を被験者とした。調査の実施期間は, 1994年7月~1995年1月である。

(2) 調査内容

二種類の検査を実施した。一つは家族構成・同居状況・家計の分担状況・介護問題・人生観・住宅状況・希望の住まい等について回答を求める質問紙調査である。もう一つは投影的方法によってパーソナル・スペースを測定し, 家族との親密さの程度を推測する検査である。投影的方法によるパーソナル・スペースの測定には, 人物をシュリエットとして提示する場合(Guard, 1969¹⁰⁾; 井原, 1981¹¹⁾)があるが, 異世代の家族成員を弁別するには不十分な

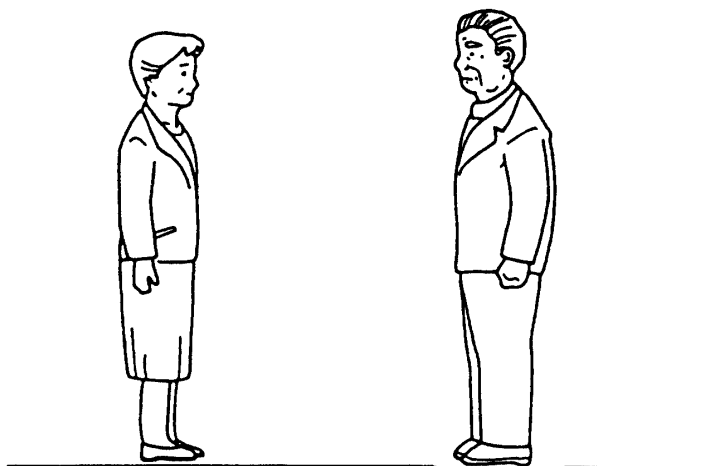


図1 男性高齢者と嫁との対人距離

立てたシールの人物が話をする場面を想像し、気詰まりにならない程度まで接近した位置に貼りつける作業を求めた。冊子内の人物の大きさは、平成2年度における厚生省の身長測定の対象年齢を1：25に縮小した人物を使用した。孫と見知らぬ子どもの大きさは、小学3年生の身長を縮小し、大人は年齢45歳～49歳、高齢者は年齢65歳～69歳を基準とした。実施に際しては、人物の提示順序による効果をラテン方格によって相殺するために冊子

め、年齢が判別できる人物とした。そして両者が向きあえるような人物を作成して使用した（図1参照）。①孫（男児）、②孫（女児）、③見知らぬ子ども（男児）、④見知らぬ子ども（女児）、⑤息子、⑥娘、⑦嫁、⑧婿、⑨配偶者、⑩友達（男性）、⑪友達（女性）、⑫見知らぬ年寄（男性）、⑬見知らぬ年寄（女性）の13の異なった人物が、1ページにつき1人ずつ描かれ、それぞれの人物に対して、自分自身と見



1. 和風の住宅



2. 洋間中心（和室あり）の住宅



3. 洋間中心（和室なし）の住宅



4. 完全に分離した2世帯住宅

図2 4種類のモデル住宅

の綴じる順序を違えたことと、実施前に一通り描かれた人物を見ることを指示した。高齢者と成人の希望する住宅様式の違いを把握するために、4種類のモデル住宅の写真を選定した。和風の住宅、洋間中心（和室あり）の住宅、洋間中心（和室なし）の住宅、完全に分離した二世帯住宅の4種類を、イメージスキャナでパソコンに画像データとしてまず取り込み、これを画像編集ソフトを使い加工して、レーザープリンターに出力したのが図2である。イメージスキャナは EPSON 社 GT-6500 を、コンピューターは Apple 社 Macintosh Centris 660 AV を、画像処理ソフトは Adobe 社 Photoshop 2.5J を使用した。

III 結 果

(1) 家族との居住形態及びその希望

I町、B市、そして成人群、それぞれについて、家族との同居状況を表1に示した。I町とB市の居住形態を比較すると、両群間には差がほとんど見られない。両群共に娘との同居率は低く、息子との同居が多い（I町、60.8%；B市、61.9%）。配偶者と別居している割合は低い。配偶者がいない割合もI町（38.2%）、B市（38.1%）と両群はほぼ同じである。I町、B市共に、全国平均よりも子世代との同居が高いことがわかる。

「あなたは家族や身内の方とどのように暮らしたいとお考えですか」との質問に対する回答結果を図3に示した。家族身内と同じ家で一緒に暮らしたいと答えたものは、I町（男性60.9%、女性49.0%）、B市（男性59.2%、女性56.6%）である。これに対して成人群では10.3%と低い。逆に家族身内と別居するが、近くで暮らしたいと回答するものが高齢者では低く、I町では5.2%（男性6.5%、女性3.9%）であり、B市では9.8%（男性12.2%、女性7.6%）

表1 家族との同居状況 数字%

被験者 居住形態	高 齢 者		成 人 対 照 群	
	I 町	B 町		
配偶者	同居	61.9	61.8	85.1
	別居	1.0	0.0	4.6
	無し	38.1	38.2	10.3
息 子	同居	61.9	61.8	63.2
	別居	25.7	25.5	15.0
	無し	12.4	12.7	21.8
娘	同居	9.3	13.7	49.4
	別居	56.7	60.8	10.4
	無し	34.0	25.5	40.2
孫	同居	51.6	53.9	0.0
	別居	37.1	40.2	8.0
	無し	11.3	5.9	92.0

であった。同様の質問に関して、成人群では高く、54.0%である。要するにI町、B市の高齢者は同じ家で、家族身内と一緒に暮らしたいとの希望が高く、特に男性にこの傾向が強い。ケアサービスがI町では充実しているにもかかわらず、I町の高齢者の方が家族身内と同じ家で一緒に暮らしたいとの回答が高い。成人群では、逆に別居して近くで暮らしたいが多く、高齢者とは対照的であった。わからないとの回答はI町（男性4.4%、女性5.9%）、B市（男性0.0%、女性9.4%）、成人群（男性0.0%、女性13.4%）と、すべての群に共通して女性の方が高い。現実の家庭を考えると、女性にはどのように暮らしたいの

住まいに反映する高齢者の家族関係と生活意識について

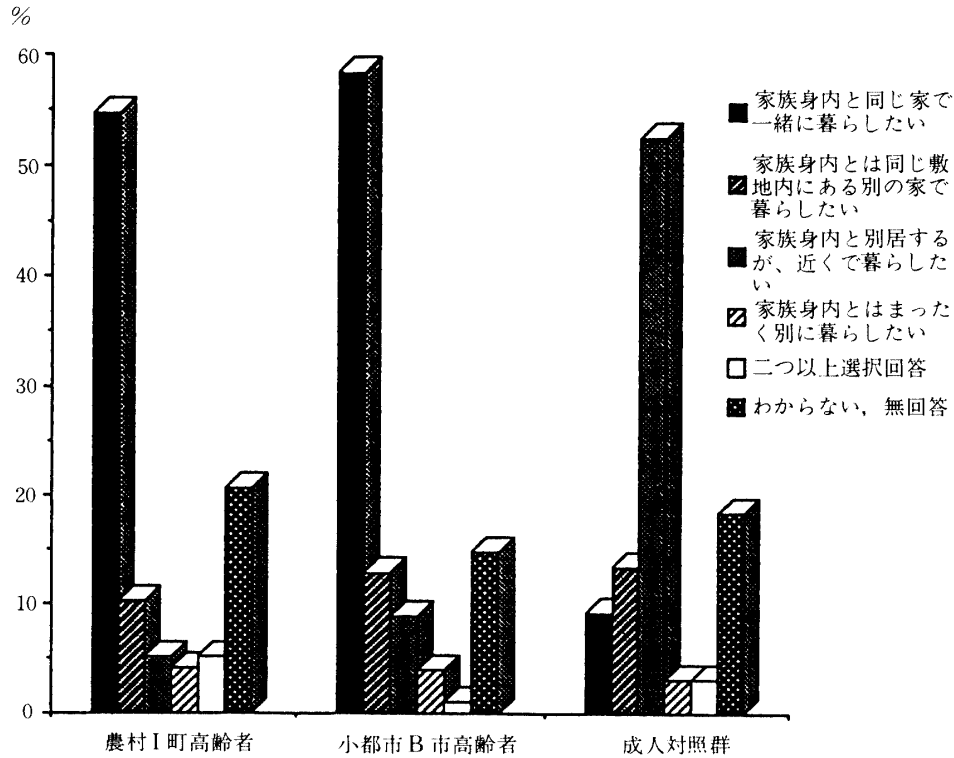


図3 希望の生活形態について

かを決めることのできない複雑な事情が多く存在するようである。

「あなたが一緒に暮らしたいと望む家族の方とは誰ですか」との質問への回答結果を、表2に示した。息子（長男）の家族と答えたものがI町、B市共に多い。I町（男性82.6%，女性72.6%）、B市（男性77.6%，女性58.5%）であるが、逆に成

人（23.0%）では低く、結果は際立った違いを示している。成人の女性は娘家族との同居を希望するものが多く（28.7%）になっている。高齢者であっても、男性よりも女性の方が娘との同居を希望する割合が高い。「世間一般の基準から考えると、あなたが一緒に暮らすべきだと考える家族のかたとはだれですか」との質問に対して、I町（男性84.8%，女性76.5%）、B市（男性85.7%，女性75.5%）が長男家族と答えている。昔の「イエ」制度的な考え方が、高齢者に

表2 希望の生活形態について

数字%

希望の生活形態	被験者		I町高齢者		B市高齢者		成人群	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
息子(長男)の家族	82.6	72.6	77.6	58.5	80.0	19.5		
息子(長男以外)の家族	6.5	3.9	2.0	7.6	0.0	1.2		
娘の家族	6.5	7.8	2.0	9.4	0.0	30.5		
その他	2.2	2.0	2.0	1.9	20.0	18.3		
無答	2.2	13.7	16.3	22.6	0.0	30.5		

とっての世間に通用する基準となっていることを、この結果は示している。成人群では長男家族と同居するのが世間の基準になっているとし

たのは46.0%に過ぎない。ただ配偶者の家族と答えたものも16.1%あり、62.1%は長男家族が同居すべき家族と答えていることになる。世間一般として、同居する家族は長男家族であると成人群でも認識する率は高い。しかし、成人群では、世間一般としての判断とは別に、同居ではなくて近くで、しかも長男家族との同居ではない家族形態を望んでいる。

(2) 家族との生活状況について

「生計のためのお金の分担をどのようにしているのか」を表3に示した。生活費を息子夫婦に全て依存している割合はそれほど高くない。I町男性では15.2%、B市男性は26.5%であり、逆に自分たちがほとんど負担しているとするものは、I町男性で19.6%、B市男性では36.1%とかなり高い。女性の場合にはこの割合がやや低くなっている。息子家族との同居率がI町は61.9%、B市は61.8%とかなり高い割合の地域であるのにもかかわらず、生計の負担を息子家族

に依存する割合はそれほど高くない。高齢者が経済的に依存するために息子家族との同居を望んでいるのではないことが窺える。

「あなたはいま、家族に気がねなく暮らしていますか」との問について、各群を比較したものが表4である。「まったく気がねなく暮らしている」「多少気がねして暮らしている」とするものについては、I町、B市共にそれほど差が認められない

表3 生計の負担について 数字%

被験者 家族との生活状況	高齢者I町		高齢者B市		成人対照群
	男性	女性	男性	女性	
息子夫婦がほとんど負担している	15.2	29.4	26.5	32.1	0
かなり息子夫婦が負担している	19.6	7.8	10.2	3.8	0
かなり自分たちが負担している	15.2	17.7	8.2	20.8	5.8
ほとんど自分たちが負担している	19.6	7.8	36.1	7.6	28.7
それぞれ別々に生活している	8.7	13.7	4.1	17.0	23.0

表4 家族との生活状況について 数字%

被験者 生計の負担	高齢者I町		高齢者B市		成人対照群
	男性	女性	男性	女性	
まったく気がねなく暮らしている	63.0	60.8	69.4	49.1	52.9
多少気がねして暮らしている	15.2	27.5	12.2	32.1	14.9
どちらかと言えば気がねして暮らしている	6.5	2.0	0	7.6	3.5
大変気がねして暮らしている	4.4	2.0	2.0	0	0

住まいに反映する高齢者の家族関係と生活意識について

表5 気楽に話ができる相手 数字%

被験者 気楽に話のできる相手		高齢者I町		高齢者B市	
		男性	女性	男性	女性
配偶者	1位	91.9	90.5	96.0	85.0
	2位	2.7	9.5	0	0
	3位	0	0	3.1	10.0
	4位	2.7	0	0	0
	5位	0	0	0	5.0
息子	1位	9.1	38.9	12.9	23.3
	2位	72.7	44.4	67.7	50.0
	3位	12.1	3.3	6.5	6.7
	4位	0	8.3	9.7	10.0
	5位	15.2	0	3.2	6.7
娘	1位	10.5	28.6	0	30.0
	2位	36.8	28.6	25.0	30.0
	3位	36.8	35.7	56.3	10.0
	4位	0	7.1	6.3	20.0
	5位	10.5	0	6.3	5.0
嫁	1位	4.2	17.2	0	30.0
	2位	12.5	27.6	9.5	23.3
	3位	41.7	20.7	28.6	23.3
	4位	25.0	13.8	19.0	10.0
	5位	4.2	17.2	19.0	10.0
娘婿	1位	7.1	0	0	0
	2位	14.3	0	0	0
	3位	14.3	31.3	0	0
	4位	14.3	12.5	18.2	22.2
	5位	21.4	31.3	18.2	11.1

が、B市の女性のみがやや低く(49.1%)になっている。「多少気がねして暮らしている」と回答する割合は、I町、B市の女性に多い。どちらかと言えば気がねして暮らしている、大変気がねして暮らしていると答えたものの総数は全体で18名と多くない。

では家庭のなかで、気楽に話ができる相手はだれであろうか。表5は気楽に話ができる相手として、どの順位がつけられたかを整理したものである。別居している場合や、亡くなっている場合には、順位がつけられていない。表5は順位がつけられたものを総数として5位までについてそれぞれの順位の割合を表にしたものである。配偶者はI町及びB市の男女の高齢者に共通して第1位に挙げられている。I町、B市の女性に共通して息子と娘を1位に挙げる割合がそれぞれの地域の男性よりも高い。これは嫁に対しても同様である。要するに男性高齢者は、気楽に話のできる家族が配偶者に集中している結果である。次いで息子が挙げられている。娘や嫁は順位が低く、気楽には話しにくい相手となっている。娘の婿は更に低い。男性の場合には、高齢になるほど、夫婦仲良く暮らすことが大切との考え方に賛成するものの割合が増加し、女性では逆にこの割合が減少すると総務庁長官官房老人対策室(1990)¹²⁾は報告しているが、この結果と共通する傾向である。

(3) 生活意識について

男は仕事、女は家庭という性別役割分担に対する回答を図4に示した。男女の性別役割分担に賛成またはどちらかといえば賛成とする高齢者は、男女共に80%を越えていた(I町男性91.3%、I町女性84.4%、B市男性81.6%)。ただ、B市の女性については、賛成またはどちらかといえば賛成が66.1%と低い。どちらかといえば反対または反対が13.2%と、他の高齢者群と比較すると高い。性別役割分担意識については、成人群では賛成はわずか6.9%にすぎない。逆に反対が20.7%を占め、どちらかといえば反対を合計すると、59.8%と賛成を上回っている。伝統的な男女の性別役割分担意識に対して、若年層ほど、又郡部よりも都市部

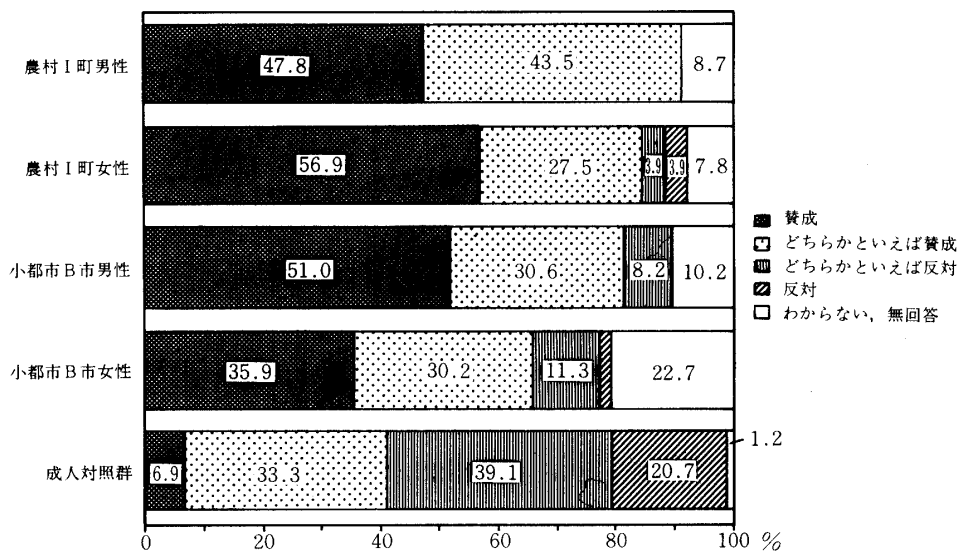


図4 性別役割分担意識について

の方が一般的には反対者の割合が多い。

ではこれまでの生き方については、どのような傾向が見られるのであろうか。表6はこれまでの生き方についての結果を示したものであ

る。I町男性もB市男性も仕事一途に生きるが、21.7%、28.6%と多い。女性でさえそれぞれI町17.7%、B市13.2%となっている。女性高齢者が仕事中心の、又は仕事を優先させる生き方をしてきたと答えているが、これは何を意味するのであろうか。I町は稲作と茶の栽培が盛んな地域であり、高齢者が従事した仕事の多くは農業であったと推察される。一方B市は繊維産業が盛んな地域で、中小の織物工場が存在する。周りには水田も広がり、稲作農業も行なわれている。家内工業的に繊維産業を支えてきた女性も少なくないであろう。高齢女性のこれまでの

表6 これまでの生き方について

教字%

生き方は、夫と共に仕事に従事して、生活を支え、その中で子どもを育てるのに精一杯努力してきたものと考えられる。これが仕事一途に生きるとの回答に反映したものである。これに対して成人群では、仕事よりも家庭のことや

生き方	被験者		高齢者B市		成人対照群
	男性	女性	男性	女性	
家庭のことは家族にまかせて、仕事一途に生きる	21.7	17.7	28.6	13.2	2.3
家庭のことも気にするが、仕事を優先させる	13.0	13.7	26.5	15.1	9.2
家庭のことは家族と協力して行い、仕事と両立させる	34.8	33.3	24.5	20.8	33.3
仕事よりも、家庭のことや趣味を優先させる	4.4	5.9	2.0	11.3	29.9
社会習慣、家族、仕事などにとらわれず自由に生きる	4.4	7.8	4.1	5.7	5.8
その他、わからない	21.7	21.6	14.3	34.0	19.5

住まいに反映する高齢者の家族関係と生活意識について

趣味を優先させるとの回答が29.9%と高齢者に比較して高い。産業の高度成長に伴い、雇用労働者が増加し、サラリーマン家庭が増えた。そして夫の給料だけによって生活する家庭が出現し、妻は家事と育児に専念するだけでよくなった。生産活動に従事しないで、専業主婦として家庭を守る生き方が、伝統的な女性の生き方と見られやすいが、歴史的に辿ればむしろ専業主婦は特異である。高齢者の中でも、B市の女性では仕事よりも家庭のことや趣味を優先させると回答した割合が多い。これは都市周辺部ほどサラリーマン家庭が多いためであり、逆に農村・山村では女性であっても家業に従事する割合が多いためと考えられる。

(4) 介護について

寝たきりになった場合の介護について心配することがあるかについて尋ねた結果をまとめたものが表7である。半数を越える人が、寝たきりになった時の介護について心配している。ただI町とB市を比較すると、I町の高齢者（男性、43.3%；女性、43.2%）は、B市（男性、28.5%；女性、24.6%）よりも、「全く心配しない」・「あまり心配しない」が多い。中高年を対象とした成人群でも、「全く心配しない」・「あまり心配しない」は37.8%であるから、I町の高齢者が寝たきりになった時の心配をするものの割合が低いことが容易に推定できる。この理由は、I町では、特別養護老人ホームを中心としたヘルパーサービス、デイケア、ショートステイなどを積極的に取り入れている。これを地域住民が身近かなものと受け取っているためであろう。

では寝たきりになったとき、誰に介護してほしいと望んでいるのであろうか。この点についてまとめたものが表8であり。I町、B市の男性は共に配偶者に期待し、嫁への期待は低い。逆に女性ではI町（35.3%）、B市（34.9%）共に息子の嫁への期待が高い。成人群では女性のみデータをまとめたが、高齢女性よりは配偶者への期待が高い。一方息子の嫁に介護を求めるものは皆無であり、娘（18.3%）への期待が高い。高齢者であれ、成人であれ、男性よりも女性の方が娘に介護を期待する。公的サービスに期待する率が高いのは成人群である。女性高齢者は、配偶者に介護をほとんど期待せず、嫁に期待する。介護を担う嫁の立場

表7 寝たきりになったときの介護の心配 数字%

介護の心配	被験者		高齢者I町		高齢者B市		成人対照群
	男 性	女 性	男 性	女 性	男 性	女 性	
よく心配することがある	19.6	31.4	20.4	24.5	15.9		
ときどき心配することがある	28.3	21.6	42.9	35.9	45.1		
あまり心配しない	34.8	37.3	26.5	20.8	32.9		
全く心配しない	6.5	5.9	2.0	3.8	4.9		
無答	10.9	3.9	8.2	15.1	1.2		

場にある成人群では、次の世代の嫁に介護を期待するものはほとんどいない。介護を担う立場にあるからこそ、自分自身に介護される時には嫁には介護を

表8 寝たきりになったときに介護を望む相手

数字% 期待しないので

介護を望む相手	高齢者I町		高齢者B市		成人対照群
	男性	女性	男性	女性	
配偶者	56.5	5.9	63.3	7.6	24.4
息子	0	9.8	2.0	0	1.2
息子の嫁	6.5	35.3	10.2	34.9	0
娘	0	9.8	2.0	15.1	18.3
公的サービス	4.4	5.9	4.1	5.7	23.2
民間有料サービス	0	0	2.0	5.7	4.9
複数回答, その他	32.6	33.3	16.3	32.1	28.0

あれば、老親の介護をめぐって心理的な葛藤が現実に存在することになる。介護をめぐって、姑世代と嫁世代との意識のずれが、家族内の葛藤や軋轢を生じ

やすくしている。さらに同居という居住形態によって、葛藤や軋轢はそのまま家庭内に内包されてしまっているものと推察される。公的サービスに期待する者は予想以上に少なく、10%以下であり、B市では極端に低い。

(5) パーソナル・スペースからみた高齢者の家族関係について

投影的方法による対人距離を表示したものが表9である。I町、B市共に、孫や配偶者との対人距離は接近しているが、嫁や婿とは離れていた。また男性高齢者であれ女性高齢者であれ、息子よりも娘との対人距離の方が近い。友人との距離はそれほど近くない。見知らぬ人物については、子どもの方が老人よりも対人距離は接近していた。B町の方が孫、婿、友人との距離が近いが両者にはそれほど大きな相違は見られない。配偶者、息子、娘、孫、嫁など女性の方が男性よりも対人距離は接近している。投影的方法によるパーソナル・スパー

第9 異なった人物との性別・地域別の対人距離

	I町高齢者				B市高齢者			
	男性(N=46)		女性(N=50)		男性(N=48)		女性(N=50)	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
配偶者	21.91mm	24.36	21.16mm	13.90	23.75mm	26.06	17.60mm	8.89
息子	29.05mm	21.29	27.46mm	18.94	31.16mm	24.87	23.02mm	14.48
娘	23.66mm	15.09	22.41mm	19.84	29.28mm	25.88	16.63mm	9.54
孫(男の子)	22.33mm	16.07	22.49mm	19.13	22.76mm	23.94	16.77mm	9.79
孫(女の子)	19.40mm	15.17	20.44mm	11.87	23.26mm	24.36	15.84mm	9.41
婿	30.37mm	14.30	39.12mm	23.59	34.96mm	24.33	32.02mm	16.38
嫁	30.47mm	18.91	29.14mm	21.57	35.62mm	27.47	27.14mm	17.30
男性の友人	34.34mm	21.70	37.62mm	28.27	33.49mm	28.08	31.89mm	18.49
女性の友人	32.39mm	19.99	28.83mm	16.93	34.94mm	27.16	24.39mm	15.02
見知らぬ男の子	36.00mm	23.96	33.41mm	23.46	39.13mm	24.72	33.92mm	22.58
見知らぬ女の子	36.52mm	26.45	30.02mm	17.71	40.40mm	25.75	31.96mm	22.71
見知らぬおじさん	38.56mm	29.26	50.91mm	34.35	46.26mm	35.33	42.00mm	23.88
見知らぬおばあさん	38.83mm	30.37	45.04mm	36.25	42.57mm	30.49	36.75mm	22.77

住まいに反映する高齢者の家族関係と生活意識について

スの測定では性差が認められるとの研究が多い。又個人差も見られる。人物全般にわたって離れている場合もあれば、接近している場合もある。個人差は大きいが人物に対応して、かなり一貫した順序づけを被験者は行なっている。そこで距離を測定した後に、この数値をもとにして順位をつけた。この数値から I 町、B 市と性差を比較すると、I 町の方が嫁との距離は近い。順位をもとに因子分析を行なった。バリマックス回転後の因子負荷量を示したものが表10-1、表10-2、表10-3、表10-4である。共通して認められる因子として、孫の因子、見知らぬ子ども、娘、息子、そして嫁と配偶者の因子である。特に嫁と配偶者の因子は同一因子上にマイナスとプラスの負荷量が高くなっていた。配偶者と親密であれば、嫁との距離は離れ、配偶者と親密でないならば、嫁との距離が近くなっていたのである。

表10-1 I 町高齢者の対人距離の順位をもとにした因子分析の結果

ROTATED FACTOR PATTERN					
	FACTOR1	FACTOR2	FACTOR3	FACTOR4	FACTOR5
孫(男の子)	-0.30534	-0.67322	-0.10760	-0.05947	-0.27811
孫(女の子)	-0.49279	-0.40271	0.07217	-0.24905	-0.39722
見知らぬ男の子	-0.07353	-0.18588	0.82131	-0.06847	-0.06095
見知らぬ女の子	-0.18739	-0.09677	0.78894	-0.07213	-0.02268
息子	-0.04386	0.71740	-0.24868	0.01313	-0.00535
娘	-0.27190	0.65352	-0.16711	0.04619	-0.23871
むこ	-0.32030	0.16420	0.00419	0.65513	0.21266
嫁	0.07657	0.04137	-0.19549	0.74975	-0.17685
配偶者	-0.38530	0.33212	-0.15439	-0.47425	0.22558
男性の友人	0.31830	-0.39822	-0.41374	-0.02610	0.44161
女性の友人	-0.05617	0.00965	-0.04952	-0.08971	0.82206
見知らぬおじいさん	0.82116	-0.08945	-0.13807	0.03909	-0.03719
見知らぬおばあさん	0.80602	0.00255	-0.02189	-0.13235	0.03418
VARIANCE EXPLAINED BY EACH FACTOR					
	FACTOR1	FACTOR2	FACTOR3	FACTOR4	FACTOR5
	2.137789	1.906730	1.658785	1.321764	1.297098

表10-2 B市高齢者の対人距離の順位をもとにした因子分析の結果

	FACTOR1	FACTOR2	FACTOR3	FACTOR4	FACTOR5	FACTOR6
孫(男の子)	0.77994	-0.14621	0.02552	0.01421	-0.30381	-0.22232
孫(女の子)	0.84059	0.00770	-0.15031	0.11335	0.04794	-0.08924
見知らぬ男の子	-0.04610	0.86836	-0.11518	0.03953	-0.13709	-0.10951
見知らぬ女の子	0.01605	0.89037	-0.09836	-0.00482	-0.06344	0.00251
息子	0.21950	-0.20387	0.72925	-0.11964	0.03700	-0.05792
娘	0.07350	-0.12172	-0.00893	0.86347	0.21031	0.06336
むこ	-0.25453	0.00167	0.76448	0.16247	-0.09612	-0.00278
嫁	-0.11823	-0.07526	0.01581	0.09017	-0.04076	0.85232
配偶者	-0.04006	-0.19169	-0.08297	-0.03155	0.87760	-0.14740
男性の友人	-0.14308	-0.22853	-0.06251	-0.76228	0.28557	-0.00091
女性の友人	-0.01502	-0.45220	-0.25791	-0.11759	-0.20733	0.45926
見知らぬおじいさん	-0.61916	-0.14308	-0.23144	-0.19566	-0.38688	-0.17078
見知らぬおばあさん	-0.49866	-0.10844	-0.42389	-0.01894	-0.43496	-0.36242
VARIANCE EXPLAINED BY EACH FACTOR						
	FACTOR1	FACTOR2	FACTOR3	FACTOR4	FACTOR5	FACTOR6
	2.103947	1.955982	1.473311	1.443588	1.407501	1.196374

表10-3 男性高齢者の対人距離の順位をもとにした因子分析の結果

ROTATED FACTOR PATTERN						
	FACTOR1	FACTOR2	FACTOR3	FACTOR4	FACTOR5	FACTOR6
孫(男の子)	-0.01747	0.87594	-0.01654	0.01957	-0.02293	0.12256
孫(女の子)	0.07947	0.78407	-0.15060	-0.21485	-0.01391	-0.16640
見知らぬ男の子	0.86995	0.05983	0.12706	0.02503	0.02232	-0.03651
見知らぬ女の子	0.87046	0.00467	-0.14456	-0.20926	-0.04054	0.00943
息子	-0.15948	-0.33041	0.65812	0.07223	0.15171	0.18414
娘	-0.32197	-0.11546	-0.17809	-0.10187	0.79927	-0.01818
むこ	-0.08432	-0.08469	-0.22757	0.75790	0.22183	0.04185
嫁	-0.08690	-0.11102	0.08744	0.72293	-0.18294	-0.15678
配偶者	-0.27344	-0.14473	-0.37152	-0.40984	-0.10225	-0.66800
男性の友人	-0.39119	-0.08446	-0.08775	-0.14699	-0.73226	-0.10493
女性の友人	-0.14768	-0.11080	-0.00236	-0.30391	-0.16199	0.76602
見知らぬおじいさん	-0.12748	-0.47554	0.69722	0.03370	-0.08278	0.13032
見知らぬおばあさん	-0.02575	-0.20437	0.78113	-0.06535	0.04455	0.18382
VARIANCE EXPLAINED BY EACH FACTOR						
	FACTOR1	FACTOR2	FACTOR3	FACTOR4	FACTOR5	FACTOR6
	1.931414	1.835905	1.826289	1.490935	1.329120	1.199493

表10-4 女性高齢者の対人距離の順位をもとにした因子分析の結果

ROTATED FACTOR PATTERN					
	FACTOR1	FACTOR2	FACTOR3	FACTOR4	FACTOR5
孫(男の子)	-0.08208	0.07773	0.82384	-0.08162	-0.02917
孫(女の子)	0.08227	-0.16728	0.76416	0.16724	-0.01864
見知らぬ男の子	0.82551	0.06690	-0.06125	0.02987	-0.19866
見知らぬ女の子	0.85593	-0.09539	-0.01262	0.03804	0.12026
息子	-0.47556	-0.04969	-0.09792	0.48137	-0.01099
娘	-0.14308	-0.25712	-0.04333	0.75794	0.11319
むこ	0.03678	-0.64060	-0.26974	0.03319	-0.01790
嫁	-0.20958	-0.17139	-0.14237	-0.01378	0.80055
配偶者	-0.23509	-0.39661	-0.16460	-0.07706	-0.67912
男性の友人	-0.23045	0.34676	-0.19651	-0.54445	0.09257
女性の友人	-0.39663	-0.34267	-0.19105	-0.57803	0.00612
見知らぬおじいさん	0.05489	0.66790	-0.21949	-0.22872	0.13032
見知らぬおばあさん	0.00088	0.67830	-0.41714	-0.13124	-0.20740
VARIANCE EXPLAINED BY EACH FACTOR					
	FACTOR1	FACTOR2	FACTOR3	FACTOR4	FACTOR5
	1.988185	1.857065	1.695441	1.550482	1.239065

(6) 希望の住宅様式について

高齢者はI町、B市共に家族身内と同じ家で一緒に暮らしたいとの同居希望が高く、差が認められない。ところが成人群は別居して近くで暮らしたいとの回答が多く、その違いははっきりしていた。希望する住宅様式について、I町、B市の高齢者、そして成人群間の違いを検討するために、図1の4種類のモデル住宅を提示し、「これからあなたが住宅を建てるとしたら、次のうちのどの住宅がよいと思いますか」との質問に対する回答を求めた。その結果を図6に示した。和風の住宅、和室のある洋間中心の住宅、和室のない洋風住宅、完全に分離した二世帯住宅の4種類

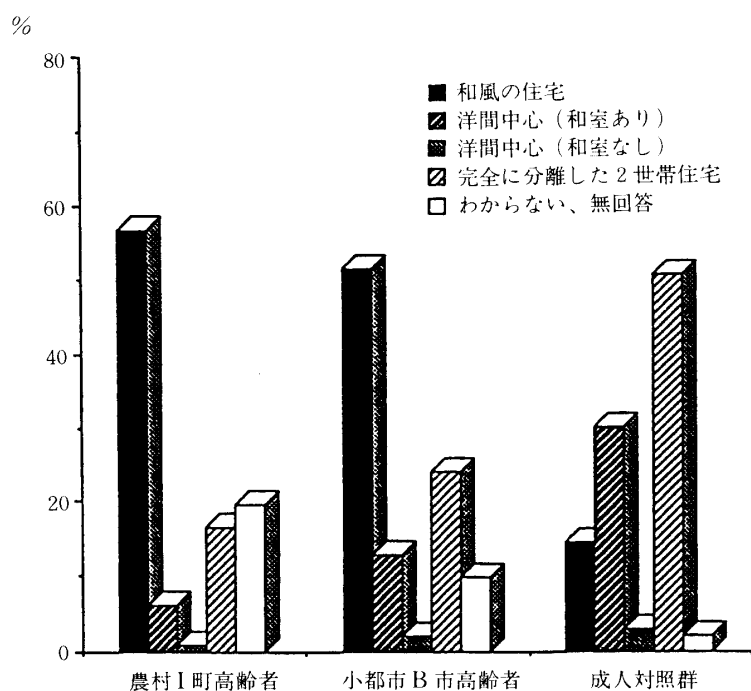


図6 希望の住宅様式

完全に分離した二世帯住宅の4種類の住宅の中で、I町、B市の高齢者は和風住宅への選択率が高い。完全に分離した二世帯住宅を選んだ率はB市がやや高い。ただ両者にはそれほど差が認められない。住宅様式を選択に関して相違が認められるのは、高齢者群と成人群間である。高齢者群は従来の和風住宅を選択する率が高いが、成人群では完全に分離した二世帯住宅を希望する。成人群が二世帯住宅を希望する背景には、家族身内とは同じ家で一緒に暮らすよりも、夫婦のプライバシーが守られ、束縛から自由である別居を希望する者が多い結果と一致する。

IV 考 察

今回実施した調査は、わが国の高齢者の同居志向の背景がいかなる理由に拠るのかをまず探ることが目的であった。このために高齢者を対象として、家族構成・同居状況・家計の分担・介護問題・人生観・住宅状況・希望の住まい等を質問紙によって調査した。さらに高齢者の家族との関係について検討するために、パーソナル・スペースを尺度として、家族間の親密さの程度を測定した。

まず、子世代との同居を望む理由が、寝たきりになった時の介護への期待によるのかを検討するために、ケアサービスが充実しているI町の高齢者を対象として調査を実施した。I町

と比較するためにB市を対照群として、同居率と同居希望率から比較した結果、両者に差はほとんど認められなかった。同居が、寝たきりになった時の介護への期待にあるとすれば、I町の高齢者の同居率は低いはずである。I町のケアサービスが他地域に比較して充実していることは、寝たきりになった時の介護について心配する比率がB市に比較して低いことから窺える。この結果からは、子世代との同居が、ただ介護への期待にあるのではないと解釈できる。

次に経済的な理由のために同居を志向するのかについて検討した。生活費を息子夫婦にすべて依存している高齢者は、各群の平均が20～30%であり、予想以上に低い。男性に比較して女性の方が、生活費を息子夫婦に依存していた率が高い。ただほとんど、または、かなり自分たちが負担しているとの回答が30～40%と予想以上に高い。もし経済的理由であれば、女性の方が同居率、同居志向が高いはずであるが、調査結果では同居希望は女性の方が男性に比べて低い。厚生統計協会(1994)¹²⁾の報告からは、高齢の単独世帯は女性に多いことがわかる。このように独居老人は圧倒的に女性である現状を考えると、経済的理由が子世代との同居の理由とはならないのである。

では如何なる理由によって同居を希望するのであろうか。同居率・同居志向率は都市部よりも農村部の方が高い。長男が跡を継ぎ、親と同居するのが慣習となっている農村地域では、この地域に住む住民にとって、自分の家の場合のみ別居を選択するのは難しいであろう。ただ現在の日本では、たとえ農村部であっても、隣近所の付き合いは希薄となっているため、同居志向を促すほどの強い影響力が、その地域の社会規範に存在するとは考えられない。

むしろ高齢者群と成人群との顕著な違いにこの問題を解く鍵が存在する。この違いをもたらす原因を探る時に、二つの視点が考えられる。一つは高齢になるに従って、保守的になり、家族と同居を希望するようになるとする視点である。加齢に伴う変化の過程としてこの違いを捉えるものである。要するに、高齢者の同居志向が老年期という発達過程の特徴であり、現在の成人群も老年期を迎えた頃には、次第に同居志向を強めるとする考えかたに拠る。

第二の視点は、個人の発達過程に多大な影響を及ぼす社会的な変化についてである。本研究で対象とした高齢者は、戦前の「イエ」制度のもとで、児童期、青年期を過ごしてきた。さらに教育勅語による教育を受けて育ってきた世代である。時代の影響が成人群とは異なった家族観を形成したと考えられる。この調査では、ほとんどの高齢者が長男との同居は世間一般の常識と答えていた。女性よりも男性の方がこの考え方を支持する率は高く、同居志向も男性が高くなっていた。一方成人群は、結婚、職業の選択などについて、個人の自由意志が尊重される時代に児童期や青年期を過ごし、戦後の民主主義教育を受けてきている。家族観は、個人の発達過程に於いて、価値観・人生観が形成される時期に、どのような文化・社会の価値規範の影響を受けたかによって規定されてくる。

日本の「イエ」制度とは、イエという「場」に家族が所属し、一体となることを基本とし

ていると青井(1989)¹³⁾はいう。日本の建築様式と「イエ」制度とは相通ずる点が認められる。建築様式と家族関係について、剣持(1978¹⁴⁾、1992¹⁵⁾)は次のように言及している。日本家屋の襖と障子の様式が、西欧の固定化された壁とは異なり、開ければ1つの部屋として広く使うことができるように流動的になっている。ちょうどそれは、日本人の「個」の意識が「みうち」に対しては一体化して明確な自他のへだてが無いように、住まいも襖や障子を取り外すことで、ひとつの部屋と化してしまうことと共通する。

調査対象となった高齢者の多くが、従来の和風住宅を選択し、家族身内と一緒に暮らしたいとする結果と一致する。逆に成人群は完全に分離した二世帯住宅を選択する率が高くなっていった。成人群は、結婚、職業の選択などについて、個人の自由意志が尊重される時代に児童期や青年期を過ごしてきた。このため高齢者世代が身内意識を強くして、家族として一体となることを求めすぎる時には、同居はきわめて困難になる。

戦後世代の成人群では子世代との同居をそれほど望まない。しかも介護を嫁に期待する率は極めて低く、娘への期待が高い。希望の住宅様式は、完全に独立した二世帯住宅を選択し、家族が一体となるよりも、それぞれの生き方を尊重しあう関係を望む。日本の家族は、戸主によって統率される家族集団から、愛情と共同生活とによって緩く束ねられた集団へと変わってきている。家族の変化にもかかわらず、母子の絆は現在でも強く、家族が母親を中心に結びついている。直系男子相続にこだわらなくなれば、老後の介護を考えると娘との同居の方が望ましいと考える高齢者もいるであろう。実際に、娘との同居が都市部では多くなっている。長男相続から娘との同居家族の出現への兆しが認められる。戦前は息子をもたぬ親は跡とりがないことを嘆いたものであるが、これからは、娘をもたぬ親、特に母親は、年老いてからの娘のいないことを嘆かねばならないであろうと河合(1980)¹⁶⁾は述べている。

ただ、個人の発達過程に影響する歴史的变化の要因を検証するには、生涯発達のモデルを明確にして研究を進める必要がある。Schaie(1979)¹⁷⁾の知能と年齢変化、そしてコホート差の分析、歴史的变化を考慮するための理論の検討(Baltes, 1987)¹⁸⁾が、今後研究を進めるにあたって重要な視点となるであろう。

引用文献

- 1) 厚生省大臣官房統計情報部保健社会統計課国民生活基礎調査室監修 グラフでみる世帯のあらまし
—平成4年国民基礎調査の結果から—厚生統計協会 1994
- 2) 総務庁長官官房老人対策室編 老人の生活と意識—国際比較調査報告 1回 中央法規出版 1982
- 3) 総務庁長官官房老人対策室編 老人の生活と意識—国際比較調査報告 2回 中央法規出版 1987
- 4) 総務庁長官官房老人対策室編 老人の生活と意識—国際比較調査報告 3回 中央法規出版 1992
- 5) 1) 前掲書
- 6) Kimmel, D. C. *Adulthood and Aging*. John Wiley & Sons, 1990, 加藤善明監訳
高齢化時代の心理学 プレーン出版 1994

住まいに反映する高齢者の家族関係と生活意識について

- 7) 今川峰子 パーソナル・スペースに影響する年齢・性・親密性・居住地域の分析 聖徳学園女子短期大学紀要第21集 1~16 1993
- 8) 伊藤明子・園田真理子 高齢化時代を住まう 建築資料研究社 1994
- 9) 総務庁長官官房老人対策室編 長寿社会と男女の役割・意識—長寿社会における男女別の意識の傾向に関する調査報告 大蔵省印刷局 1990
- 10) Guard, C. J. Personal space in children. *Child Development*, 40, 143 - 151, 1969
- 11) 井原成男 固体間距離の発達と性差 教育心理学研究 29, 227 - 231, 1981
- 12) 1) 前掲書
- 13) 青井和夫 第二章 日本人とイエ 家族とは何か 講談社現代新書 1974
- 14) 剣持武彦 「間」の日本文化 講談社日本新書 1978
- 15) 剣持武彦 比較日本学のすすめ 朝文社 1992
- 16) 河合隼雄 家族関係を考える 講談社日本新書 1980
- 17) Schaie, K. W. The primary mental abilities in adulthood : An exploration in the development of psychometric intelligence. Baltes, P. B. & Brim, O. G. (Ed.) *Life-span Development and Behavior*, 67~115, Academic Press, 1979
- 18) Baltes, P. B. Theoretical propositions of life-span developmental psychology : On the dynamics between growth and decline. *Developmental Psychology*, 23, 611~626, 1987